

| | |
|-------------------------|---|
| タイトル Title | 冷静な認識が必要 |
| 著者 Author(s) | 木村, 幹 |
| 掲載誌・巻号・ページ Citation | 図書新聞,2696: |
| 刊行日 Issue date | 2004-10-09 |
| 資源タイプ Resource Type | Article / 一般雑誌記事 |
| 版区分 Resource Version | author |
| 権利 Rights | |
| DOI | |
| JaLCDOI | |
| URL | http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90000402 |

やれやれマコーマックは相変わらずだ。本書の著者、ガバン・マコーマックは、現在、オーストラリア国立大学にて教鞭を取る東アジア研究者である。同じ歴史的修正主義の立場を取る『朝鮮戦争の起源』の著者、ブルース・カミングスが、自らの主張を若干強引ではあるにせよ、地道な調査によって発見した膨大な一次資料によって裏付けているのとは対照的に、マコーマックのこの著作には、一次資料からの引用は、英語のものを除けば余り出てこない。自らの学位論文における研究対象として張作霖を選び、一九七〇年代には日本の「経済侵略」を批判し、八〇年代には朝鮮戦争におけるアメリカの責任を追及した彼は、特定の地域や時代を選んでじっくりと研究を行う専門家というよりは、イシューを選んでタイムリーな意見を出すことを旨とする、東アジアウォッチャーである、と言った方が相応しい。

実際、本書においても、例えば、北朝鮮や韓国の過去について書かれた部分は、現在の朝鮮半島の国際的水準の中では、完全に古くなってしまっている。朝鮮戦争に関する記述は、マコーマックが自身、一九八三年に執筆した著作における理解を基礎に、和田春樹と朴明林の著作の内容を接木したものにしかならない。李承晩を恰も国民的基盤が全くないアメリカの傀儡であるかのように記述するこの著作においては、解放直後のあらゆる「政権構想」において、李承晩の名が常に第一位に掲げられたことや、朝鮮戦争において北朝鮮軍がソウル入城を果たした後も、李承晩政権を倒すような人民蜂起が起こらなかったことの意味が見落とされている。アメリカや国連を非難することに急である余り、複雑な社会や人々の思惑が単純化され、結果として、現実の重要な部分の多くが無視されてしまっている。

同様のことは、本書の中心的内容である、北朝鮮を巡る部分についても言うことができる。韓国政府が主張するような宥和政策により、北朝鮮を変化と発展へと導くことができる、と断言するこの著作において、決定的に欠如しているのは、北朝鮮における改革開放、特に、その体制の民主化と人々への自由の付与が、ほぼ間違いなく、北朝鮮を崩壊へと導く、ということである。彼自身も指摘しているように、北朝鮮の経済は完全な失敗状態にあり、韓国との経済格差は絶望的なまでに開いている。にも拘らず、改革開放後の北朝鮮が依然、国家として団結を保ち、人々をしてその困難な生活 ― 何故なら、どんなに急速な経済成長が開始されても、韓国との格差は十年や十五年では埋まらないレベルに達している ― の中に留まることを選択させるのは、至難の業であるという他はない。そのような危険に満ちた道を金正日や北朝鮮政府が進んで歩くことを想像することは難しい。北朝鮮を巡る各国の苦悩の中心も、また「同朋」である筈の韓国が、一見、友情に満ちた「太陽」政策を掲げながらも、個々の北朝鮮からの脱北者に対して、意外なまでに冷淡である理由もここにある。北朝鮮問題に対して最も重要なこの部分を、著者は知ってか知らずか、完全に落としてしまっている。

本書のこのような性格の原因は、恐らく、それが書かれた理由と関係がある。著者によれば、本書は「二〇〇三年に北朝鮮との戦争の脅威がせまっているのではないか」という

「危機感」によって書かれている。即ち、本書は、その当初から、北朝鮮を「悪の枢軸」の一つとして非難するアメリカやブッシュ政権の議論への「アンチテーゼ」として構想されたものであり、従って、分析の以前から結果は決まっていたことになる。しかしそれでは、ブッシュ政権の奉じる（と筆者が考えた）北朝鮮への強硬路線を支える「ステレオタイプ」な北朝鮮情勢認識に対して、北朝鮮への融和路線を支える為のもう一つの「ステレオタイプ」な北朝鮮、或いは、東アジア情勢認識を意図的に作り上げただけに過ぎない。ブッシュ政権における「悪の枢軸」論が、レーガン政権におけるソ連に対する「悪の帝国」論に由来することは明らかであるから、マコーマックは八〇年代と同じく、「何時もの相手」に対して歴史的修正主義という「何時もの議論」をもってしただけだ、と考えているのかもしれない。

しかし、そのような「ステレオタイプ」化した議論を繰り返しても、本当の北朝鮮の姿も、そして、それを取り巻く問題に対する解決策も見えてこない。重要なのは、様々な思い込みを一旦捨て、如何にして対象や自らの感情から距離を置くか、であると思う。その意味で本書、特に本評の対象となっている日本語版において最も大きな意味を持っているのは、二〇〇二年における北朝鮮の拉致告白後の、日本世論の動向についての分析であるかも知れない。勿論、この部分においても、拉致被害者の「家族会」を、「高度に政治的意図を持つグループ」であるとして事実上決め付けるなど、認識の齟齬や控え目に言っても行き過ぎた「レッテル張り」に近い部分が多々見られることは、否定できない。また、拉致被害者を公式に「帰国」させなかったことに対する、北朝鮮側の意見を一方的に「人間への同情が表現されている」と評するなど、バランスは大きく崩れている。

しかしながら、私達は知っておく必要がある。例えば、拉致は大きな悲劇であり、私達にとって許し難いことである。それは私達が拉致被害者を同朋であると考え、彼らに共感するからに他ならない。だが、外部の人間にとっては — そう私達が不幸な飛行機事故において「日本人が乗っていなかった」ことに「満足」するように — それは残念ながら「ひとごと」なのだ。そして「ひとごと」であれば、問題はやはり違って見えてくる。それを憤ることは簡単だが、ひとまずその事実を冷静に認識し、彼らの考えから学ぶべきところがあれば学び、或いは、彼らの考え方を変えさせるべく、粘り強く働きかけて行くことが必要になる。その意味では、本書は、確かに「学ぶべきところの多い」著作である、のかもしれない。